



Title	「日本史・日本近代史学習歴アンケート」に見るCJLC 日研究生向け研究科目「日本史入門」「日本近代史」の 現状と課題
Author(s)	佐野, 方郁
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2010, 8, p. 11-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11888
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「日本史・日本近代史学習歴アンケート」に見る CJLC日研生向け研究科目「日本史入門」「日本近代史」の現状と課題

佐野 方郁

【要旨】

日本政府の財政状況が悪化し続ける中で、日研生プログラムは短期交換留学プログラムとの違いを明確化し、日本での大学院進学や研究者養成につながる独自の教育目標を設定すべきではないかといった意見が出され始めている。しかし、原籍大学の多くが専門教育を十分に提供できていない今日の状況を考えると、日研生に日本の大学院進学に必要な学力を厳密な意味で身につけさせることは難しい。日本の大学院に進学させる目標を頭の片隅にほんの少しだけ残しながら、日研生の学力をできるだけ高めるための方策を考えることが今日における日研生教育の課題なのである。本稿では、日本の小学校・中学校・高校レベルの日本史上の人物に関する日研生の既習度を測ることを通じて、原籍大学における日本史教育の実態を明らかにする一方で、筆者がCJLCで「日本史入門」や「日本近代史」の授業をどのような形でやっているのかを紹介する。

はじめに

国費日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生と表記）とは、日本の大学で日本語・日本文化に関する研修を積むことを目的に、日本政府（文部科学省）から1年間の奨学金を提供された、海外の大学で日本語・日本文化を専攻する学部レベルの短期留学生である¹⁾。日研生プログラムは1979年の発足以来、「知日派」育成のためのプログラムとして認知され、近年では毎年350名前後の学生がプログラムを利用して、日本各地の56大学に留学を果たしている。

大阪大学日本語日本文化教育センター（以下、CJLCと表記）が日研生の受け入れを開始したのは、大阪外国語大学留学生別科時代の1985年10月のことであった。CJLCは大阪外国語大学時代に国内屈指の日研生教育機関としての地位を確立し、2009年10月からは国内最大となる47名の日研生を新たに迎えるに至っている。

しかし、近年日本政府の財政状況が悪化し続ける中で、日研生プログラムを取り巻く状況は厳しさを増してきている。実際文部科学省担当官が臨席して毎年開催される「日研生問題に関する検討会議」では、日研生プログラムを存続させるためには、費用対効果の面からいっても、大学間協定による短期交換留学プログラムとの相違を示す必要がある。日研生プログラムは日本での大学院進学や研究者養成につながる独自の教育目標を設定すべきではないかといった発言も出され始めているのである²⁾。

筆者はこれまで日本の大学院進学を意識して、日研生の学力を少しでも高めたいと考えながら、日研生教育に携わってきたので、日研生教育をそうした方向で特化させることにはおおむね賛成の立場である。しかし、その際忘れるべきでないのは、日研生の原籍大学の多くはヨーロッパや韓国の一部の大学を除いて、日本語運用能力の改善に力を注ぐあまり、日本語・日本文化に関する専門教育を十分に提供できていない点である。こうした状況下では、受け入れ大学の側でかなり計画的に教育を進めたとしても、日研生本人のよほどの努力と才能が伴わない限り、日本の大学院進学につながる教育効果を得ることは難しい。

それでは、日研生は日本語能力以外の専門分野についてどの程度の教育を受けて来日してい

るのだろうか。また、原籍大学の多くが日本語・日本文化に関する専門教育を十分に提供できていないとすれば、日研究生は日研究生教育を受けることで、日本の大学院進学に必要とされる学力にどの程度まで近づくことができるのだろうか。

これから本稿では、以上の問題関心に基づいて、CJLCの日研究生向け専門教育について日本史教育の事例を中心に紹介していく。第1章では、まずCJLCの日研究生の専門教育の特色について述べた後、CJLCのオリエンテーションで毎年実施している「学習経験に関する質問票」に対して、2008年10月に渡日した日研究生42名がどのように回答したのかを提示し、日研究生の渡日時の専門知識の有無に地域的な特徴が見られるかどうかについても検証する。

第2章と第3章では、日研究生の専門教育の中でも特に日本史教育について検討していく。まず第2章では、2008年10月来日の上述の42名に対して筆者が実施した「日本史・日本近代史学習歴アンケート」をもとに、日本人学生の教育内容と比較しながら、日本史全般や日本近代史に関する日研究生の渡日時の学力を分析する一方で、日研究生の原籍大学の日本史教育の特徴を地域別に明らかにする。また第3章では、筆者が実際に日研究生向け研究科目として授業を担当している「日本史入門」や「日本近代史」の授業内容を紹介したうえで、専門教育の向上に関して原籍大学の反応が鈍い理由についても、筆者の知る範囲で簡単に指摘したいと思う。

周知の通り日本史という科目は日本の小学校・中学校・高校のすべての教育課程で授業が提供されている点で、日本の大学や大学院で日本語・日本文化を専攻したいと考える日本人学生にとっては基礎学力を形成するために必要不可欠な科目となっている。日研究生に日本の大学院進学に必要とされる学力を身につけさせたいと考えるのであれば、専門分野が何であれ、日本人学生と同様に日本の高校レベルの日本史に相当するだけの基礎学力を定着させることが望ましい。また日研究生の中でも、日本史や古典文学などの高度な知識が要求される分野を専攻する学生が大学院進学を目指す場合には、高校レベルの日本史に関する知識だけでは不十分で、その時代に関する最新の研究もある程度把握しておく必要がある。

筆者が本稿の中で日本の小中学校レベルはもとより高校レベルの日本史教育を常に意識しているのは、そうした考え方に基づいている。管見の限りでは、日研究生と日本人学生の学力を比較しながら、日研究生の専門教育について分析する試みはこれまで全くといっていいほどなされてこなかった。こうした中、本稿が日研究生の日本史教育に関してこうした試みを行うことには、日研究生と日本人学生の学力比較に端緒を付ける点で、日本史以外の専門教育に対しても少なからぬ意味があるのではないと思われる。本稿の議論が一つのきっかけとなり、日研究生の専門教育についてさらなる議論が行われることを期待する次第である。

第1章 CJLCの日研究生向け専門教育の特色と原籍大学の専門教育の特徴

CJLCは留学生日本語教育センター時代の2001年と2002年に、日研究生向けの専門教育に関する二つの特色を打ち出した。その特色とは第一に、学内外研修活動を中心とする研修コースとは別に、学生自身が選んだテーマを研究する研究コースを日研究生プログラムの中に設置し、研究コースの中で学生の研究テーマに関する専門教育を実施していることである。研究コースは日本語研究コースと日本文化研究コース、論文作成トラックと自主研究トラックに細分化される。研究コースに所属する日研究生は週1コマの個人指導ないしは少人数グループ指導による専門演習を通じて、自ら選択したテーマに関する日本語の修了論文・修了レポートを1年間かけて作

成していく（図表1）。

図表1 日研究生プログラムのコース・トラックの概要

日研究生プログラム	{	研修コース
		研究コース（日本語研究コース/日本文化研究コース）
	{	論文作成トラック
		自主研究トラック

第二に、日研究生に対しては、週60コマを超える中上級レベルの日本語科目である研修科目以外に、週30コマ程度の日研究生向けの専門科目である研究科目が日本語で開講されている。研究科目は大きくいて日本語学・日本語教育学を扱う日本語研究科目と日本文学・日本史などの日本文化を扱う日本文化研究科目に分類される。研究科目のうち「日本語学入門」「日本文学入門」「社会学入門」などの入門科目はこれまでその分野について原籍大学で勉強したことがない学生を対象に開講されている科目である。また筆者が担当している「日本史入門」と「日本近代史」も日本文化研究科目の一つである（図表2）。

図表2 2009年度開設科目一覧

種別	2009年度開設授業科目名		2009年度開設授業合計時間数
専門演習	日本語・日本文化研修指導 日本語研究指導 日本文化研究指導		春学期 週34時間（週17コマ） 秋学期 週34時間（週17コマ）
研修科目	中級文法、中級漢字、中級作文、中級読解、中級会話、中級聴解、情報処理実習（中級）		春学期 週24時間（週12コマ） 秋学期 週32時間（週16コマ）
	上級文法、上級漢字、上級作文、上級読解、上級会話、上級聴解、情報処理実習（上級）		春学期 週120時間（週60コマ） 秋学期 週104時間（週52コマ）
研究科目	日本語	日本語学入門、日本語教育学入門、国語学入門、日本語学演習、語用論・意味論、形態論・統語論、音声学・音韻論、類型論、日本語教育学実習、国語学研究、古典文法	春学期 週14時間（週7コマ） 秋学期 週12時間（週6コマ）
	日本文化	日本文化入門、日本文学入門（近現代文学）、日本の伝統芸能、日本史入門、仏教学入門、社会学入門、日本経済入門、日本文化論、日本文学史、古典文学研究（古代・中世文学）、古典文学研究（近世文学）、比較文学研究、古代史、中世史、近世史、近代史、現代史、民俗学研究、日本美術、日本服装史、日本思想史研究、日本の思想と宗教、現代文化演習、地域文化研究、政治学、国際関係論、政治思想研究、日本経済研究、経営学、社会学研究、教育社会学、女性学、漢文講読	春学期 週52時間（週26コマ） 秋学期 週58時間（週29コマ）

CJLCが日研究生に対して以上のようなきめ細かな指導体制を取っているのは、原籍大学の多くが専門教育を十分に提供できていない中で、日本の大学院進学を意識しながら、日研究生の学力を少しでも高めたいと考えたからであった。

例えば、CJLCでは原籍大学での専門教育の状況を確認する目的で、毎年オリエンテーション期間中に日研生に対して「学習経験に関する質問票」を実施している（図表3）。

図表3 「学習経験に関する質問票」（2008年10月実施分）

Questionnaire on Your Study Experience
学習経験に関する質問票

平成20年度秋学期
2008-2009 Fall Semester

Name: _____ Nationality: _____

Class: _____ Student ID Number: _____

あなたが自国の大学でこれまでに次のような内容の授業を履修したかどうか教えてください。また、その授業のレベルも教えてください。答えは□をチェックしてください。

① 一般言語学 General Linguistics

- ☐ 入門・概論レベル (Lower division courses 1～2年生のための授業)
- ☐ 専門レベル (Upper division courses 2～4年生のための授業)
- ☐ 授業を受けたことがない

② 日本語学 Japanese Linguistics (注意！日本語の練習の授業のことではありません)

- ☐ 入門・概論レベル (Lower division courses 1～2年生のための授業)
- ☐ 専門レベル (Upper division courses 2～4年生のための授業)
- ☐ 授業を受けたことがない

③ 日本文学 Japanese Literature

- ☐ 入門・概論レベル (Lower division courses 1～2年生のための授業)
- ☐ 専門レベル (Upper division courses 2～4年生のための授業)
- ☐ 授業を受けたことがない

④ 日本の歴史 Japanese History

- ☐ 入門・概論レベル (Lower division courses 1～2年生のための授業)
- ☐ 専門レベル (Upper division courses 2～4年生のための授業)
- ☐ 授業を受けたことがない

⑤ 日本の思想・宗教 Japanese Thought, Japanese Religion

- ☐ 入門・概論レベル (Lower division courses 1～2年生のための授業)
- ☐ 専門レベル (Upper division courses 2～4年生のための授業)
- ☐ 授業を受けたことがない

⑥ 日本文化 Japanese Cultural Studies

- ☐ 入門・概論レベル (Lower division courses 1～2年生のための授業)
- ☐ 専門レベル (Upper division courses 2～4年生のための授業)
- ☐ 授業を受けたことがない

10月8日(木)16:30までにOfficeに出してください

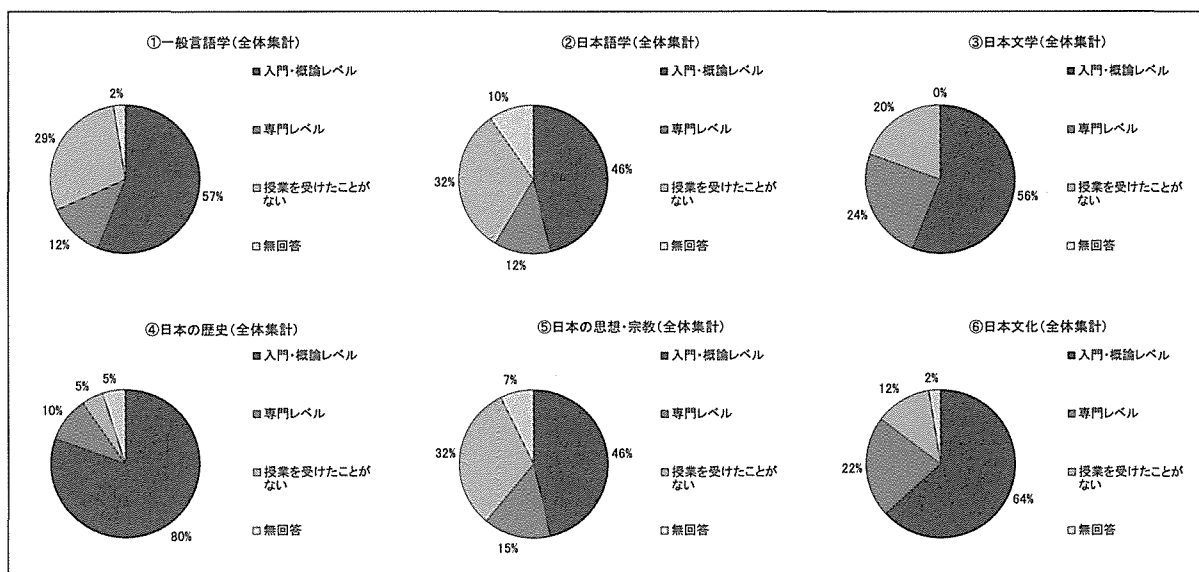
2008年10月から2009年9月までCJLCに在籍した日研生42名の国籍・地域別人数の内訳は次の通りであった（図表4）。

図表4 CJLC日研生（2008－2009）の国・地域別学生数

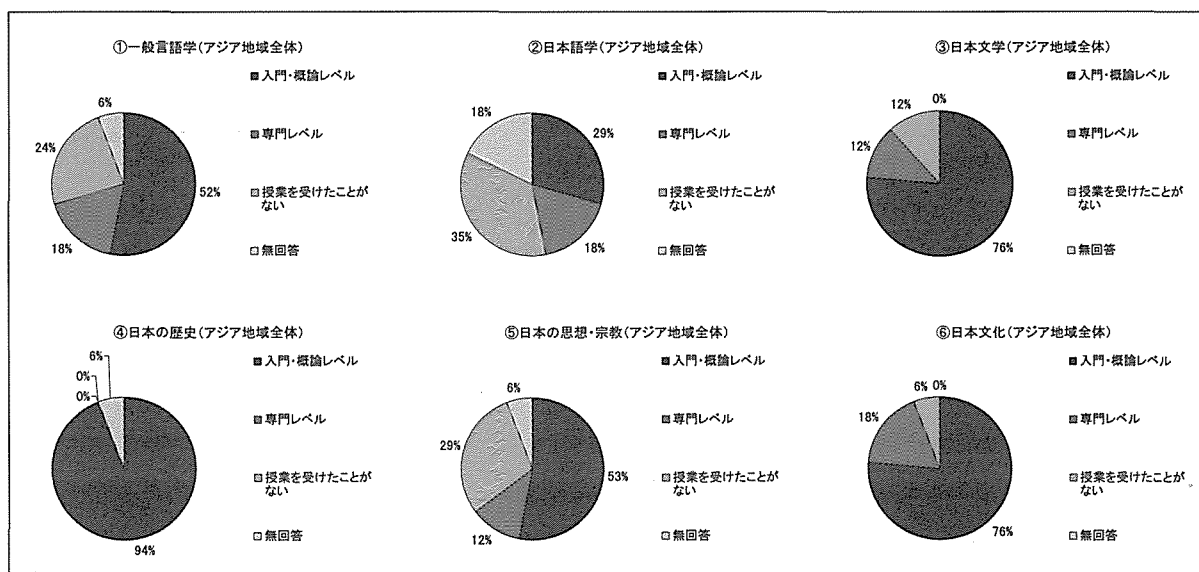
アジア地域	16名	欧州地域	19名
大韓民国	3名	英国	1名
中華人民共和国	3名	オーストリア共和国	1名
インド	4名	オランダ王国	1名
インドネシア共和国	1名	スウェーデン王国	1名
タイ王国	2名	ハンガリー共和国	1名
ベトナム社会主義共和国	3名	フィンランド共和国	1名
モンゴル国	1名	フランス共和国	1名
		ブルガリア共和国	4名
中東地域	1名	ベルギー王国	1名
イラン・イスラム共和国	1名	ポーランド共和国	5名
		ラトビア共和国	1名
大洋州地域	1名	ロシア連邦	1名
オーストラリア連邦	1名		
		北米地域	2名
		アメリカ合衆国	2名
		中南米地域	2名
		ブラジル連邦共和国	1名
		メキシコ合衆国	1名

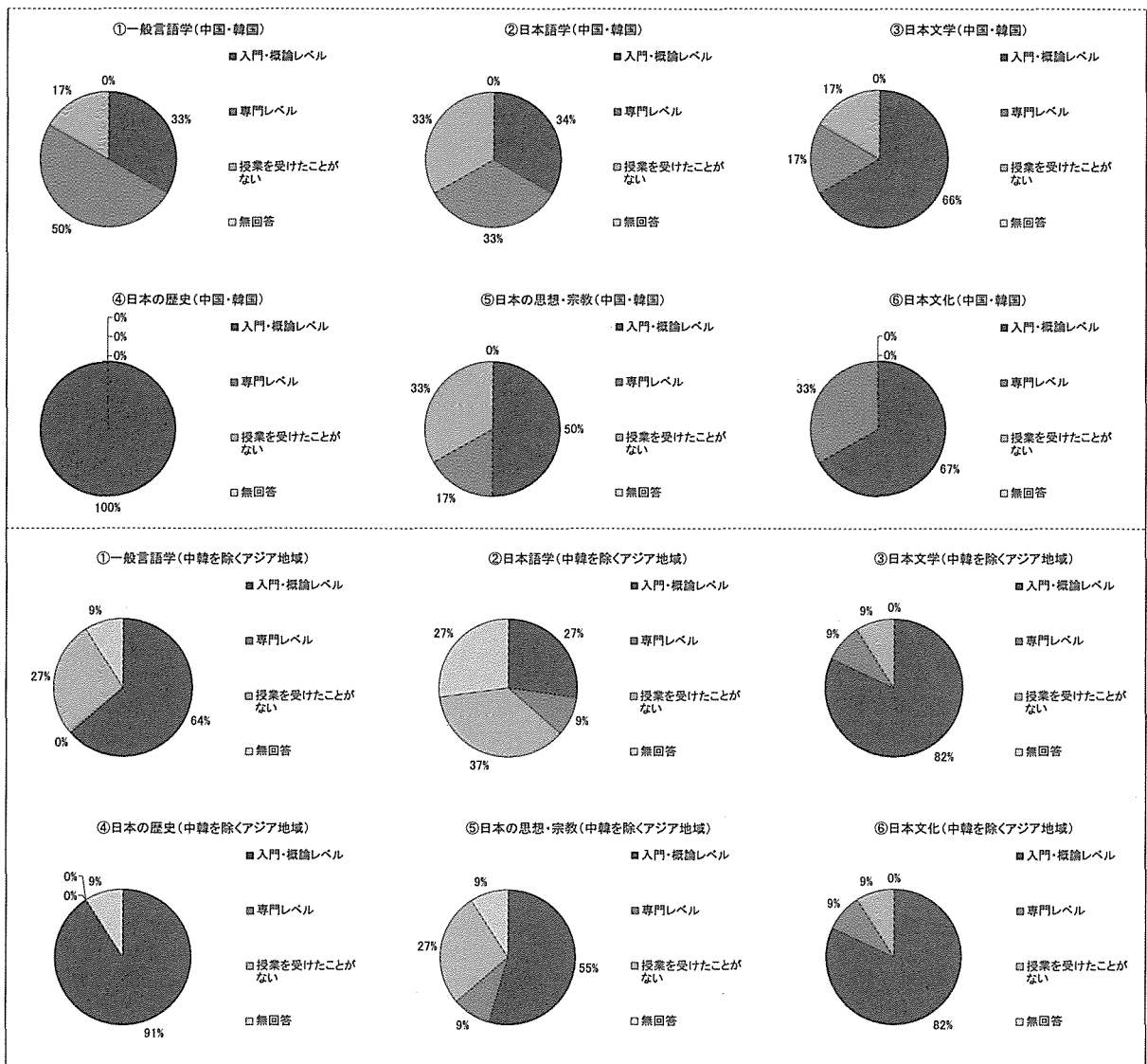
ここでは、原籍大学の多くが専門教育を十分に提供するには至っていないことを確認するために、2008年10月来日の日研究生が「学習経験に関する質問票」に対して行った回答の全体集計を見ておこう。この全体集計によれば、原籍大学で入門科目でさえ受講したことのない日研究生の割合は日本語学で32%、日本の思想・宗教で32%、日本文学で20%、日本文化で12%、日本の歴史で5%であった。また原籍大学で入門・概論レベルの授業を受講したことがある日研究生の割合は、日本語学、日本の思想・宗教で46%、日本文学で56%、最も割合の高い日本の歴史に至っては80%を占めているが、第2章で詳述するように、少なくとも日本の歴史に関しては、日研究生のいう入門・概論レベルの授業には世界史や日本事情の一部として行われた授業も含まれているようで、その水準は決して高くない。とはいえ、専門レベルの授業を受講した日研究生の割合も、日本の歴史で10%、日本語学で12%、日本の思想・宗教で15%、最も高い割合の日本文学でさえも24%に留まってしまっているのである（図表5-1）。

図表5-1 「学習経験に関する質問票」への回答（全体集計）

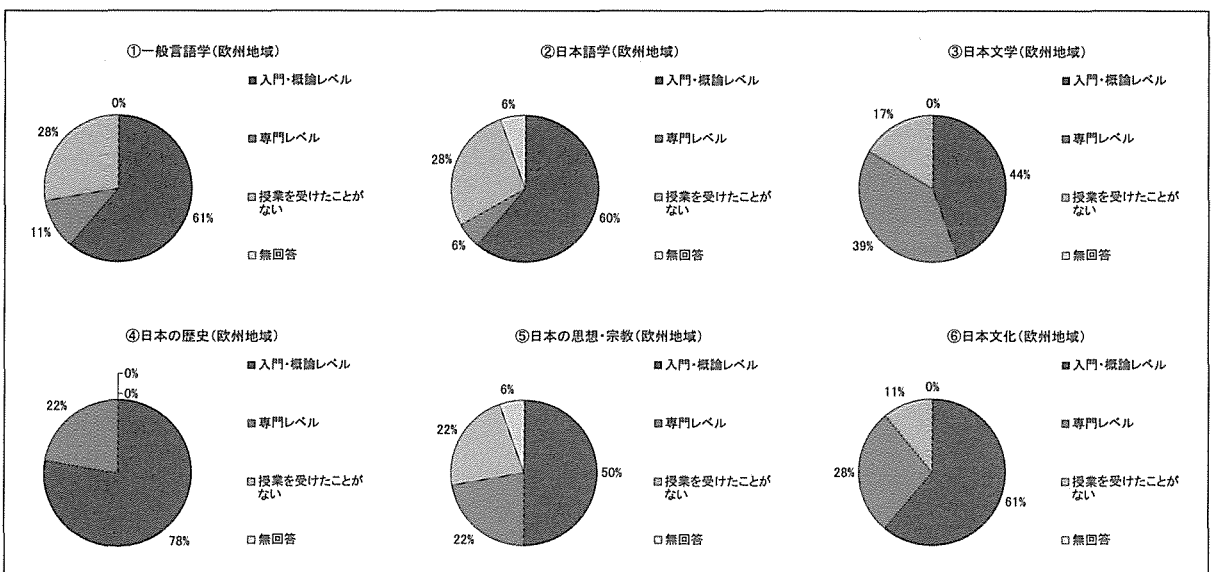


図表5-2 「学習経験に関する質問票」への回答（アジア地域）

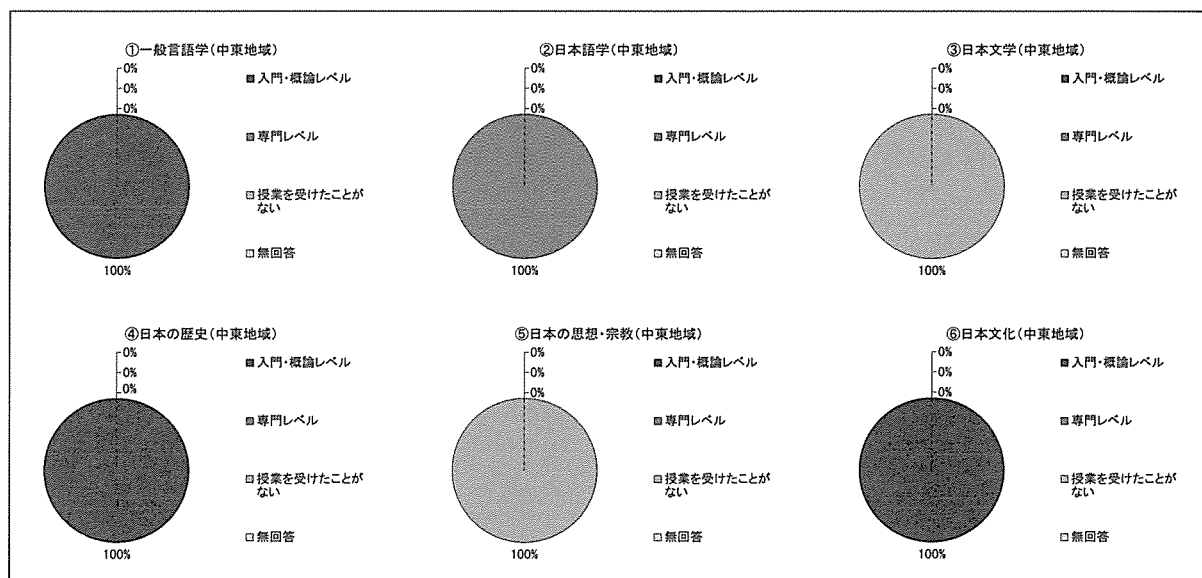




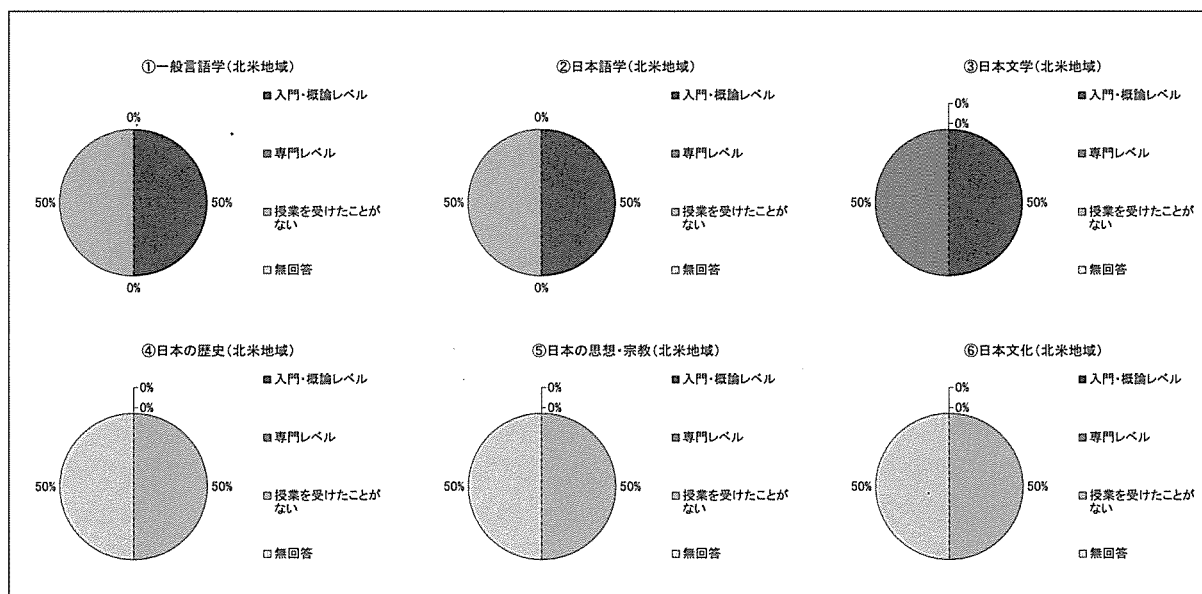
図表5-3 「学習経験に関する質問票」への回答(欧州地域)



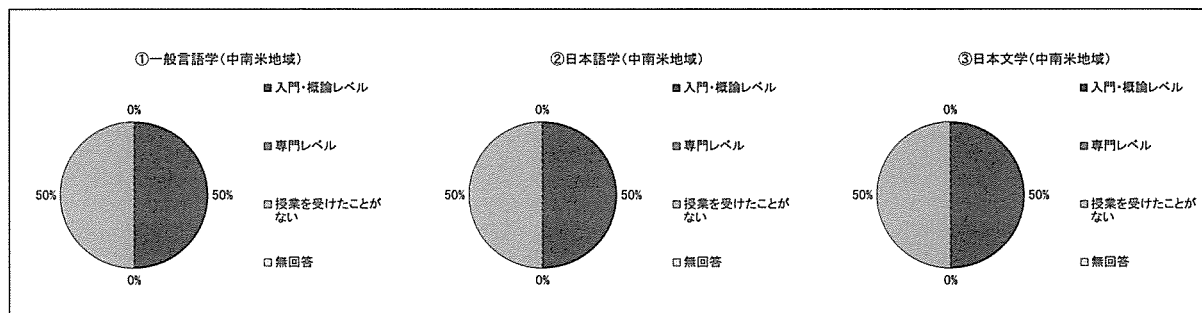
図表 5 - 4 「学習経験に関する質問票」への回答（中東地域）

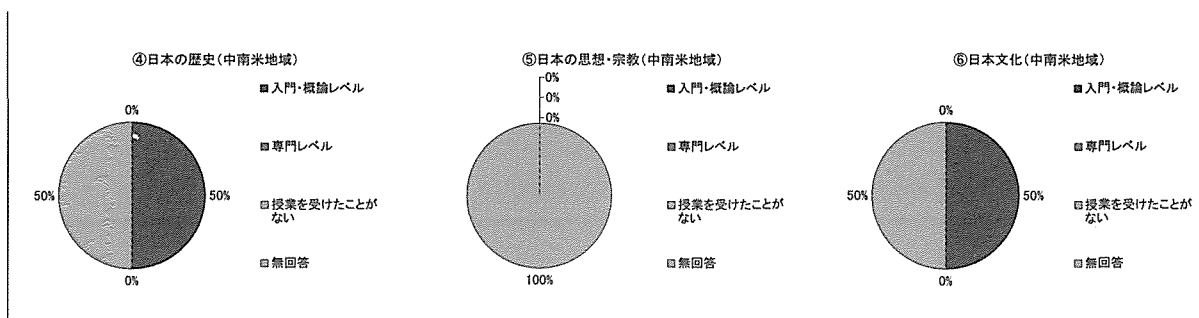


図表 5 - 5 「学習経験に関する質問票」への回答（北米地域）

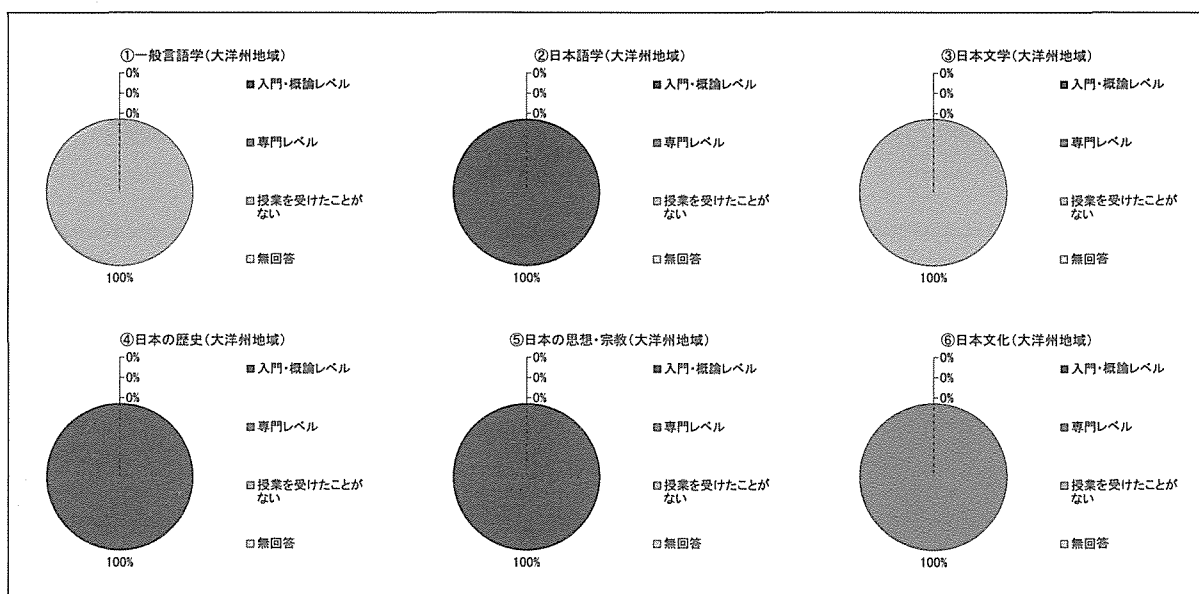


図表 5 - 6 「学習経験に関する質問票」への回答（中南米地域）





図表 5 - 7 「学習経験に関する質問票」への回答(大洋州地域)



次に原籍大学の専門教育に関する地域別の特徴を検討するために、受け入れ学生数が5名以上の中国・韓国、中韓を除くアジア地域、欧州地域の3つの地域からの日研生が「学習経験に関する質問票」に対してどのように回答しているのかを見てみよう。まず、同じアジア地域である中国・韓国と中韓を除く地域を比較してみると、専門教育の置かれている状況は若干異なっているように見える。実際筆者の経験からいっても、特に韓国では、日本語学や日本文化を中心に専門レベルの授業を受けたことのある学生の割合が相対的に高く、専門教育がある程度重視されているのに対して、中韓を除くアジア地域では専門レベルの授業を受けたことのある学生の割合が全体的に低い。また欧州地域では、専門レベルの授業の提供状況を見る限り、日本語学よりも日本文化に関する専門教育が重視されていることが分かる(図表5-2、5-3)。

その際注目すべきは、原籍大学における専門教育のあり方が日研生の研究テーマの選択に影響を与えているように思われることである。例えば、2004年10月から2009年9月までの期間にCJLCの日研生プログラムの研究コースに在籍した総勢163名の研究テーマを地域別に集計すると、中国・韓国や欧州地域では日本語学・日本語教育学を専攻する学生の割合が24-25%、社会科学系を含めた広義の日本文化を専攻する学生の割合が75-76%であったのに対して、それ以外のアジア地域では日本語学・日本語教育学が58%、日本文化が42%の割合であった(図表6)。原籍大学で専門レベルの授業を受講した割合が相対的に高い中国・韓国や欧州地域出身の

日研究生は専門分野が多岐にわたっている反面、中国・韓国以外のアジア地域出身の学生は日本文化に関する専門レベルの授業を受講した経験が少なく、日本語学習の延長で研究を捉えているためか、日本語学・日本語教育学を専攻する傾向が見られるのである。専門分野に関する学生の選択肢を増やす意味でも、原籍大学における専門教育の向上が必要なのである。

図表6 CJLC日研究生プログラム研究コース研究テーマ専門分野別集計図表(2004.10-2009.9)

	人 文 科 学								社会科学			合計
	言語学・日本語教育学	文学	歴史	古典文学・伝統芸能	伝統文化 (伝統芸能を除き、衣食を含む)	仏教学・宗教学・思想	民俗学	美学	社会学 (教育・社会・サファカルチャーを含む)	政治学・国際関係・法律 (戦後政治史を含む)	経済学・経営学	
(アジア地域)	25	6	2	3	1	2	0	0	4	1	6	50
(中国・韓国)	3	2	1	1	0	1	0	0	1	0	3	12
大韓民国	2	2	1	1		1			1			8
中華人民共和国	1										3	4
(中国・韓国以外のアジア地域)	22	4	1	2	1	1	0	0	3	1	3	38
インド	1	1		1					1		2	6
インドネシア共和国	4	2	1									7
スリランカ民主社会主義共和国	2											2
タイ王国	2				1				1			4
ベトナム社会主義共和国	10	1										11
モンゴル国	3			1		1			1	1	1	8
(欧州地域)	24	9	9	4	6	12	6	4	16	5	5	100
アゼルバイジャン共和国	2			1								3
イタリア共和国	1					1			1			3
ウクライナ	2	1				1			1		2	7
ウズベキスタン共和国									1			1
英国			1	1		2			1			5
オーストリア共和国	1				1			1	1	1		5
オランダ王国	1	1	1						1			4
カザフスタン共和国										1		1
クロアチア	1											1
スイス連邦	1		1						1		1	4
スウェーデン王国		1				1			1			3
スペイン						1						1
ドイツ連邦共和国									1	1		2
ハンガリー共和国	1	1	2				1		1			6
フィンランド共和国	1											1
フランス共和国			1			1						2
ブルガリア共和国	5			2	4	2	1		2	2	1	19
ベルギー王国			1				2		2			5
ポーランド共和国	5	2	1		1	2		3				14
ラトビア共和国			1						1			2
ルーマニア		1					1					2
ロシア連邦	3	2				1	1		1		1	9
(中東地域)	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
イラン・イスラム共和国				1								1
トルコ共和国			1									1
(北米地域)	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
アメリカ合衆国						1						1
カナダ					1							1
(中南米地域)	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	5
チリ共和国	1											1
ブラジル連邦共和国	1								1			2
メキシコ合衆国									1		1	2
(大洋州地域)	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	4
オーストラリア連邦	1								1			2
ニュージーランド	1					1						2
(合計)	53	15	12	8	8	16	6	4	23	6	12	163

第2章 「日本史・日本近代史学習歴アンケート」に見る原籍大学の日本史教育の実態

第1章では、CJLCの日研究生向け専門教育の特色を紹介した後、「学習経験に関する質問票」に対する日研究生の回答を分析することで、原籍大学の多くが日本語・日本文化に関する専門教育を十分には提供できていないことを指摘した。しかし、「質問票」は日研究生の渡日段階での学力を全体的に把握するための資料には成り得ても、専門科目に関する入門レベルや専門レベルの基準が世界的に統一されていないことから分かるように、授業内容等を具体的に設定していくうえでの資料としては役立たない。筆者は現在担当している「日本史入門」と「日本近代史」の授業内容を検討する際に参考にできるような形で、原籍大学でどのような授業が行われているかを調査したいと考え、2008年10月来日の日研究生42名が帰国する直前の2009年8月から9月にかけて「日本史・日本近代史学習歴アンケート」を実施した（図表7）。

図表7 「日本史・日本近代史学習歴アンケート」

日本史・日本近代史学習歴アンケート	
現在、日本語・日本文化研修留学生の、母国での日本史や日本近代史の学習歴について調査しています。調査結果を公表する際に個人名が出ることはありませんので、アンケートに協力してください。	
国：.....	
I あなたの大学のカリキュラムの中に、日本史の授業はありますか。当てはまるものに○をしてください。（いくつ○してもいいです。）	
A. 日本の歴史を勉強する授業は全くない。	C. 中世史（中世史）
ア. 聞いたことがある	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
B. 日本の歴史を少しだけ勉強する世界史や日本事情などの授業がある。	D. 近世史（近世史）
ア. 聞いたことがある	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
C. 古代から近代までをすべて勉強する日本史入門の授業がある。	E. 現代史（現代史）
ア. 聞いたことがある	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
D. 日本の古代史、中世史、近世史、近代史を勉強する授業が別々にある。	F. 日本文化（日本文化）
ア. 聞いたことがある	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
II 日研究生として来日する前の段階で、あなたは自分の大学で日本史を勉強しましたか。当てはまるものに○をしてください。（いくつ○してもいいです。）	G. 経済学（経済学）
A. 日本の歴史を勉強する授業は全く受けなかった。	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
B. 日本の歴史を少しだけ勉強する世界史や日本事情などの授業を受けた。	H. 政治学（政治学）
ア. 聞いたことがある	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
C. 古代から近代までをすべて勉強する日本史入門の授業を受けた。	I. 社会学（社会学）
ア. 聞いたことがある	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
D. 日本の古代史、中世史、近世史、近代史のいずれかの授業を受けた。	J. 法学（法学）
ア. 聞いたことがある	ア. 聞いたことがある
イ. 聞いたことがない	イ. 聞いたことがない
III 江戸時代までに出てくる人物の名前を、自分の国の大学の授業の中で聞いたことがありますか。「聞いたことがある」「聞いたことがない」のどちらかを選んで、○をしてください。	K. 文学（文学）
A. 徳川家康	ア. 聞いたことがある
ア. 聞いたことがある	イ. 聞いたことがない
イ. 聞いたことがない	L. 数理学（数理学）
B. 徳川家康	ア. 聞いたことがある
ア. 聞いたことがある	イ. 聞いたことがない
イ. 聞いたことがない	
IV 日本近代史に出てくる次の人物の名前を、自分の国の大学の授業の中で聞いたことがありますか。「聞いたことがある」「聞いたことがない」のどちらかを選んで、○をしてください。	
A. 大久保清	
ア. 聞いたことがある	
イ. 聞いたことがない	
B. 板垣退助	
ア. 聞いたことがある	
イ. 聞いたことがない	
C. 伊藤博文	
ア. 聞いたことがある	
イ. 聞いたことがない	
D. 山縣有朋	
ア. 聞いたことがある	
イ. 聞いたことがない	
E. 桂 太吉	
ア. 聞いたことがある	
イ. 聞いたことがない	
F. 夏目漱石	
ア. 聞いたことがある	
イ. 聞いたことがない	

なお、CJLCでは日研究生向け研究科目は選択科目の一つとして提供されているに過ぎず、全日研究生を対象としたアンケートを実施するためには、学生に個人的に協力を仰ぐしかない。今回のアンケートでは協力を得やすくするため、質問内容や項目数を最低限に簡素化した。

以下、質問内容について簡単に説明しておく。まず、質問Ⅰと質問Ⅱでは原籍大学でどのレベルの日本史の授業があるのかと実際にどのレベルの授業を受けたことがあるのかを調査した。これらの質問のうち、特に質問Ⅱの内容は第1章で使用した「学習経験に関する質問票」の内容と重複しているように見える。にもかかわらず、筆者がここで同趣旨の質問を繰り返したのは、筆者の印象からすると、80%の日研究生が原籍大学で入門レベルの日本史の授業を受けたとする「質問票」の全体集計の数値はパーセンテージが高すぎるように思われたからである。そのため、筆者は、「質問票」では(1) 授業を受けたことがない、(2) 入門レベルの授業、(3) 専門レベルの授業の三段階であった選択肢を、質問Ⅰと質問Ⅱにおいては(1) 授業が開設されていない(授業を受けたことがない)、(2) 世界史や日本事情の一部として日本の歴史を勉強する授業、(3) 古代から近代までをすべて勉強する授業、(4) 古代史・中世史・近世史・近代史のいずれかの時代のみを勉強する授業の四段階に改めた。

また、質問Ⅲと質問Ⅳでは原籍大学の授業内容について具体的に調査するため、質問Ⅲでは前近代史上の人物15名、質問Ⅳでは近代史上の人物12名について、原籍大学の授業の中で聞いたことがあるかないかを調査した。その際あらかじめ確認しておきたいことは、質問項目にあがっている合計27名の人物の難易度である。はじめにの部分でも述べたように、日本史は日本の小学校・中学校・高校のすべての教育課程で授業が提供されている科目であるため、歴史上の人物がどの教育課程の教科書から登場してくるかがおおむね判断できるなど、留学生と日本人学生の学力を比較することが容易である。

質問Ⅲで回答を求めている前近代史上の人物は筆者の担当する「日本史入門」で扱う人物の中から構成されている。「日本史入門」は原籍大学で日本の歴史を全く勉強したことがない学生を対象に提供されている関係上、一つの授業の中で原始時代から近代までの日本の歴史を概観できる代わりに、授業の難易度は低めに設定されている。そのため、質問Ⅲで尋ねている15名は日本人であれば必ず知っているような人物から選んである。15名中13名は「小学校学習指導要領」の社会の項目において、授業で取り上げるべき人物としてあがっている42名の中から選択した³⁾。また、それ以外の2名についても日本の中学校用歴史教科書で占有率10%以上を占める東京書籍、大阪書籍(現在は文教出版から刊行)、帝国書院、教育出版のすべての教科書で登場する足利尊氏と松尾芭蕉を選択した⁴⁾(図表8)。

一方、質問Ⅳの近代史上の人物12名は筆者の担当する「日本近代史」の授業の中で扱っている人物の一部である。「日本近代史」は「日本史入門」とは異なり、原籍大学で日本の歴史を勉強したことがある学生を対象とした科目であり、日本の大学院進学を意識しながら、日研究生の学力を少しでも高めておくことがここでの目標となる。そうした考えから、質問Ⅳの近代史上の人物12名は日本の小学校、中学校、高校のすべての教育課程からまんべんなく尋ねる形で選定した。大久保利通、福沢諭吉、伊藤博文、野口英世の4名は日本の「小学校学習指導要領」の中で取り上げるべき人物としてあがっている。桂太郎、夏目漱石⁵⁾、原敬、加藤高明、東条英機⁶⁾の5名は中学校の歴史教科書で登場している。山県有朋、幣原喜重郎、近衛文麿の3名は高校レベルとなるが、すべての高校日本史の教科書で扱われている(図表9)。

図表8 「日本史・日本近代史学習歴アンケート」質問Ⅲの歴史上の人物の難易度

	小学校学習指導要領	小学校用教科書（占有率10%以上）			中学校用教科書（占有率10%以上）				高校用教科書での頻度 ★日本史B（前近代史を含んだ通史）の11教科書中
		東京書籍	教育出版	（現在は日本文 から刊行） 大阪書籍 教出版	東京書籍	（現在は日本文 から刊行） 大阪書籍 教出版	帝国書院	教育出版	
占有率	—	49.9	26.3	17.1	51.2	15.4	14.2	11.8	—
卑弥呼	○	△	△	○	○	○	○	○	11
聖徳太子	○	○	○	○	○	○	○	○	11
中大兄皇子（天智天皇）	○	○	△	○	○	○	○	○	11
聖武天皇	○	○	○	○	○	○	○	○	11
藤原道長	○	○	○	○	○	○	○	○	11
紫式部	○	○	○	○	○	○	○	○	11
源頼朝	○	○	○	○	○	○	○	○	11
足利尊氏	×	×	×	×	○	○	○	○	11
足利義満	○	△	○	△	○	○	○	○	11
雪舟	○	○	○	△	△	○	△	○	11
織田信長	○	○	○	○	○	○	○	○	11
豊臣秀吉	○	○	○	○	○	○	○	○	11
徳川家康	○	○	○	○	○	○	○	○	11
松尾芭蕉	×	×	×	×	○	○	○	○	11
近松門左衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	11

註 小学校用教科書・中学校用教科書の記号は、本文中で登場するものは○、年表やコラムなどで登場するものは△、全く登場しないものは×で表記した。

出典 「小学校学習指導要領」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b.htm)

『新編 新しい社会 6上』(東京書籍、2009年)、『小学社会 6年上』(日本文教出版、2009年)、『小学社会 6上』(教育出版、2009年)

『新編 新しい社会 歴史』(東京書籍、2009年)、『中学社会 歴史的分野』(日本文教出版、2009年)、『社会科 中学生の歴史』(帝国書院、2009年)、『中学社会 歴史』(教育出版、2009年)

全国歴史教育研究協議会編『新課程用 日本史B用語集』(山川出版社、2009年)

『教科書レポート』第49号〔2005年版〕(『教科書レポート』編集委員会、2005年)、61頁

『教科書レポート』第50号〔2006年版〕(『教科書レポート』編集委員会、2006年)、69頁

図表9 「日本史・日本近代史学習歴アンケート」質問Ⅳの歴史上の人物の難易度

	小学校学習指導要領	小学校用教科書（占有率10%以上）			中学校用教科書（占有率10%以上）				高校用教科書での頻度 ★日本史A（現代史中心）の7教科書、日本史B（前近代史を含んだ通史）の11教科書の合計18教科書中
		東京書籍	教育出版	（現在は日本文 から刊行） 大阪書籍 教出版	東京書籍	（現在は日本文 から刊行） 大阪書籍 教出版	帝国書院	教育出版	
占有率	—	49.9	26.3	17.1	51.2	15.4	14.2	11.8	—
大久保利通	○	○	○	○	○	○	○	○	18
福沢諭吉	○	○	△	△	○	○	○	△	18
伊藤博文	○	○	○	○	○	○	○	○	18
山県有朋	×	×	×	×	×	×	×	×	18
桂太郎	×	×	×	×	○	×	○	○	18
夏目漱石	×	△	×	×	○	○	○	○	18
原敬	×	×	×	×	×	○	○	○	18
加藤高明	×	×	×	×	○	○	○	×	18
幣原喜重郎	×	×	×	×	×	×	×	×	18
野口英世	○	○	△	△	△	○	○	△	11
近衛文麿	×	×	×	×	×	×	×	×	18
東条英機	×	×	×	×	×	×	○	○	18

註 小学校用教科書・中学校用教科書の記号は、本文中で登場するものは○、年表やコラムなどで登場するものは△、全く登場しないものは×で表記した。

出典 「小学校学習指導要領」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b.htm)

『新編 新しい社会 6上』(東京書籍、2009年)、『小学社会 6年上』(日本文教出版、2009年)、『小学社会 6上』(教育出版、2009年)

『新編 新しい社会 歴史』(東京書籍、2009年)、『中学社会 歴史的分野』(日本文教出版、2009年)、『社会科 中学生の歴史』(帝国書院、2009年)、『中学社会 歴史』(教育出版、2009年)

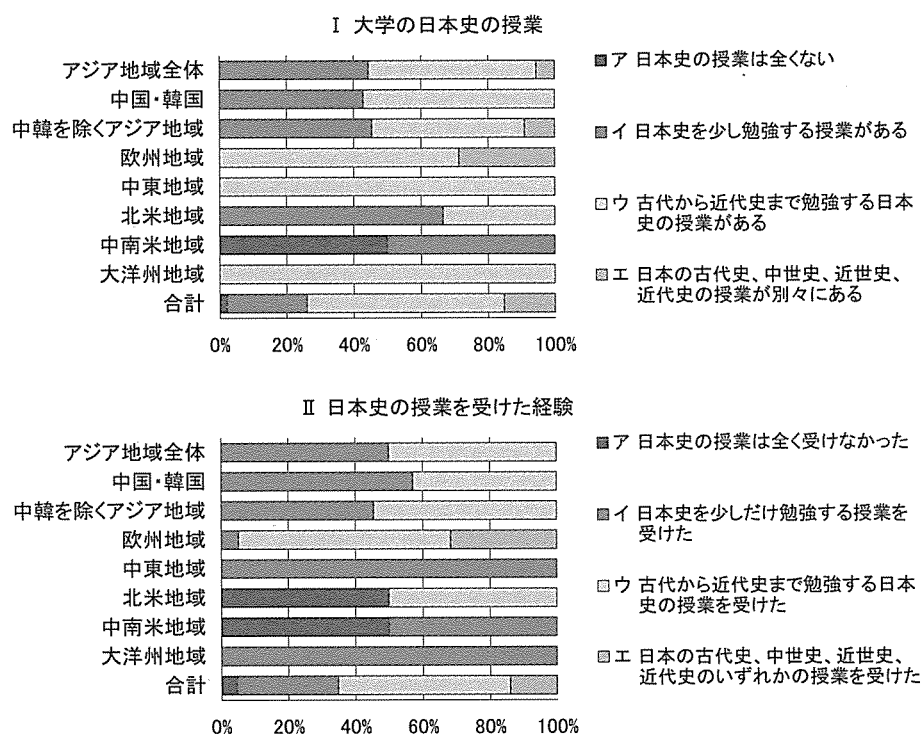
全国歴史教育研究協議会編『新課程用 日本史B用語集』(山川出版社、2009年)

『教科書レポート』第49号〔2005年版〕(『教科書レポート』編集委員会、2005年)、61頁

『教科書レポート』第50号〔2006年版〕(『教科書レポート』編集委員会、2006年)、69頁

以上、説明が若干長くなったが、それでは「日本史・日本近代史学習歴アンケート」の集計結果を見て行こう。まず、質問Ⅰと質問Ⅱの全体集計を見てみると、質問項目を四段階にした分だけ、「学習経験に関する質問票」のときよりも、原籍大学の多くが高いレベルの日本史教育を提供できていない現状が明らかとなる。原籍大学で日本史の授業が全く提供されていないと回答した学生は2.3%、日本史が未習であると回答した学生も4.7%に留まるなど、日研生の日本史科目の既習度は今回の調査においても極めて高い。しかし、古代史・中世史・近世史・近代史のいずれかの時代のみを勉強する専門性の高い授業を提供している大学は15.2%に過ぎず、原籍大学でそうした授業を受けたことがある日研生の割合も14.0%と決して高くはない。また今回の調査からは、「質問票」で80%の日研生が原籍大学で受けたと回答した日本史の入門レベルの授業の中には、古代から近代までをすべて勉強する授業だけではなく、世界史や日本事情の一部として日本の歴史を勉強する授業も含まれていることが判明した。前者の授業を履修した51.2%の日研生でさえも専門性が十分であるとはいいい難い。しかし、それよりも専門性が落ちる後者の授業を履修した学生も30.2%存在しているのである（図表10）。

図表10 「日本史・日本近代史学習歴アンケート」質問Ⅰ・質問Ⅱの集計結果

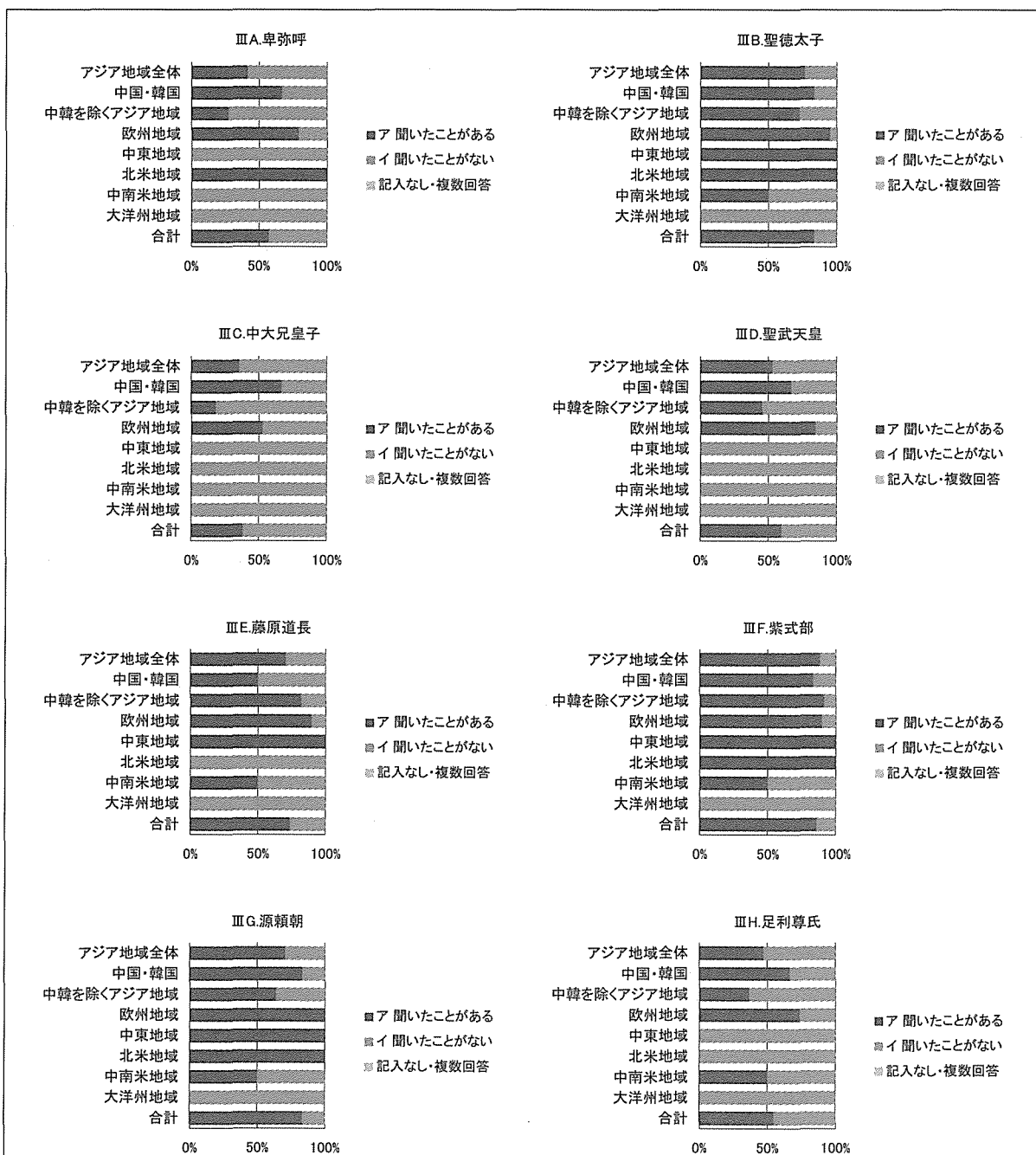


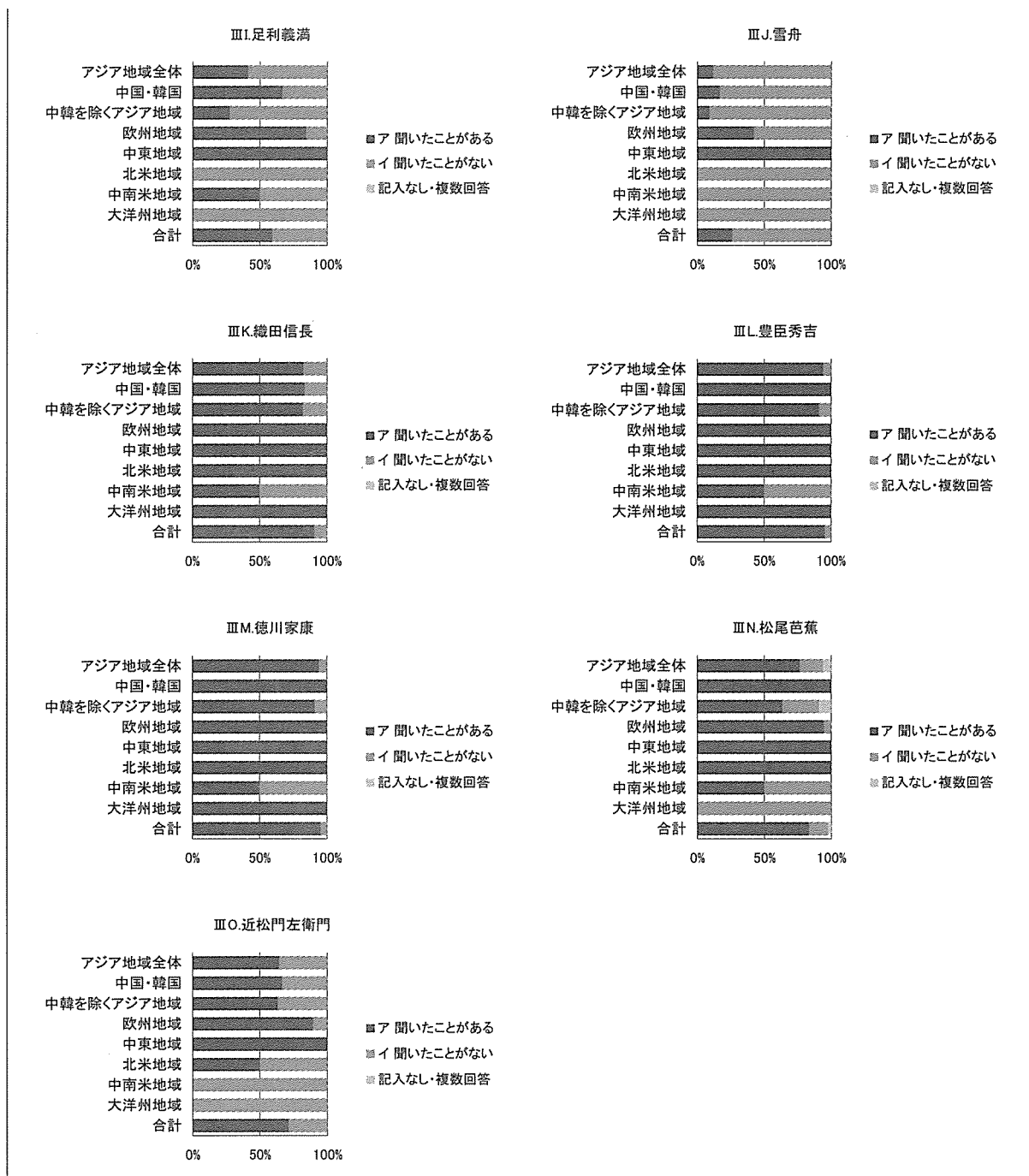
次に、質問Ⅲと質問Ⅳの人物ごとの全体集計を見ていくことで、原籍大学の日本史教育の実態を、日本人学生の教育内容との比較の面からも確認しておこう。これら質問のうち、質問Ⅲの15名は前述したとおり筆者の担当する「日本史入門」で扱う、日本人であれば必ず知っているような日本の小中学校レベルの人物たちである。日研生教育において日本の大学院進学につながるような教育効果を得たいと考えるのであれば、すべての学生がこれら15名の人物について原籍大学で学習してから来日することが望ましい。

しかし、日研生の回答を見る限り、原籍大学で日本の歴史を学習したことがない学生を除い

た、すべての学生が原籍大学で学習したことがあると回答した人物は既習度95.2%の豊臣秀吉と徳川家康の2名のみであった。日研生の既習度が80%以上であった人物も、聖徳太子（83.3%）、紫式部（85.7%）、源頼朝（83.3%）、織田信長（90.5%）、豊臣秀吉、徳川家康、松尾芭蕉（83.3%）の7名に留まり、卑弥呼（57.1%）、中大兄皇子（天智天皇）（38.1%）、聖武天皇（59.5%）、足利尊氏（54.8%）、足利義満（59.5%）、雪舟（26.2%）の6名については既習度が60%を下回る結果となってしまったのである（図表11）。以上の結果だけ見ても、原籍大学で日本の歴史を勉強したことがある学生の中にも「日本史入門」を履修することが望ましい学生が何人か含まれていることは明らかである。

図表11 「日本史・日本近代史学習歴アンケート」質問Ⅲの集計結果

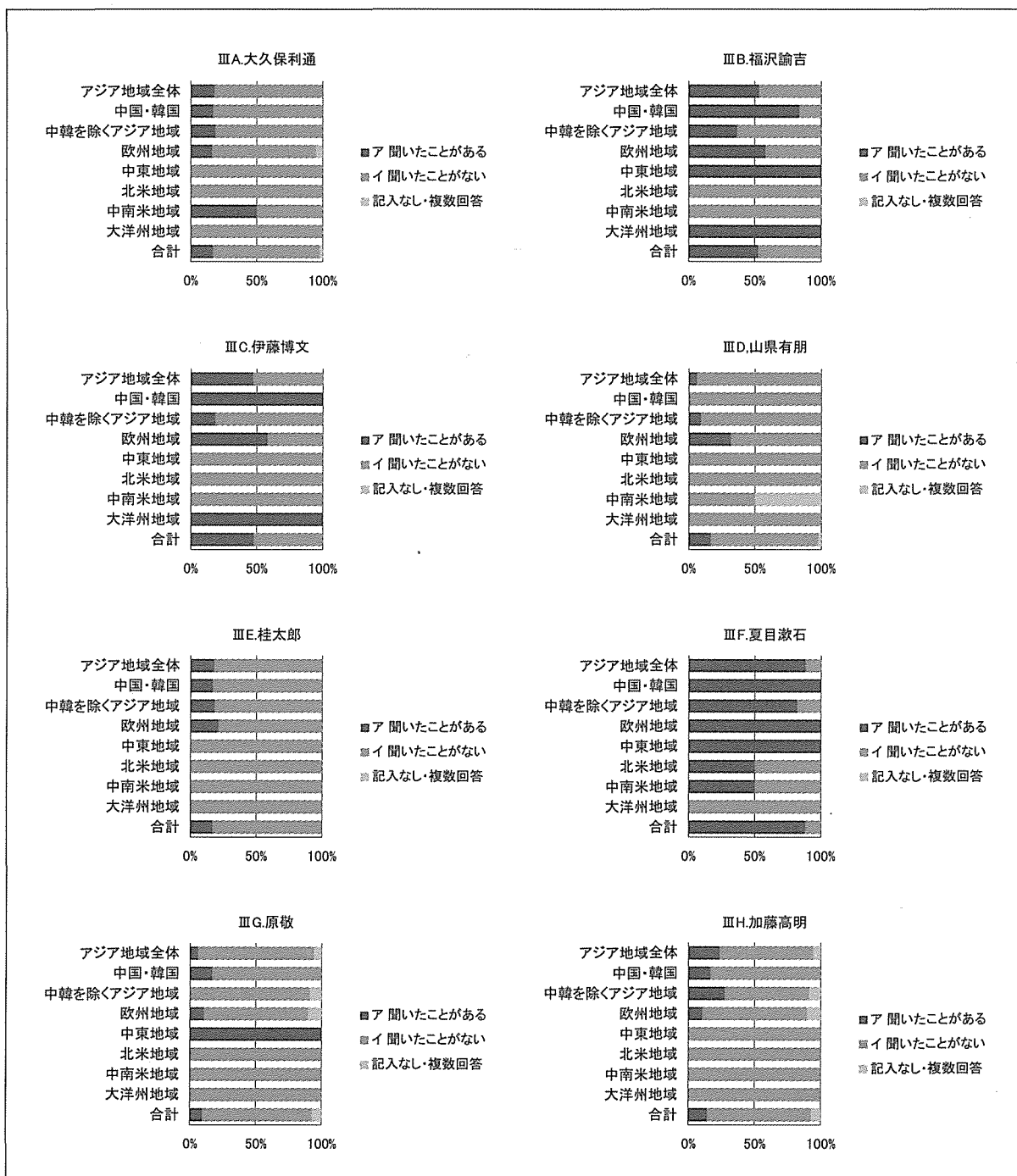


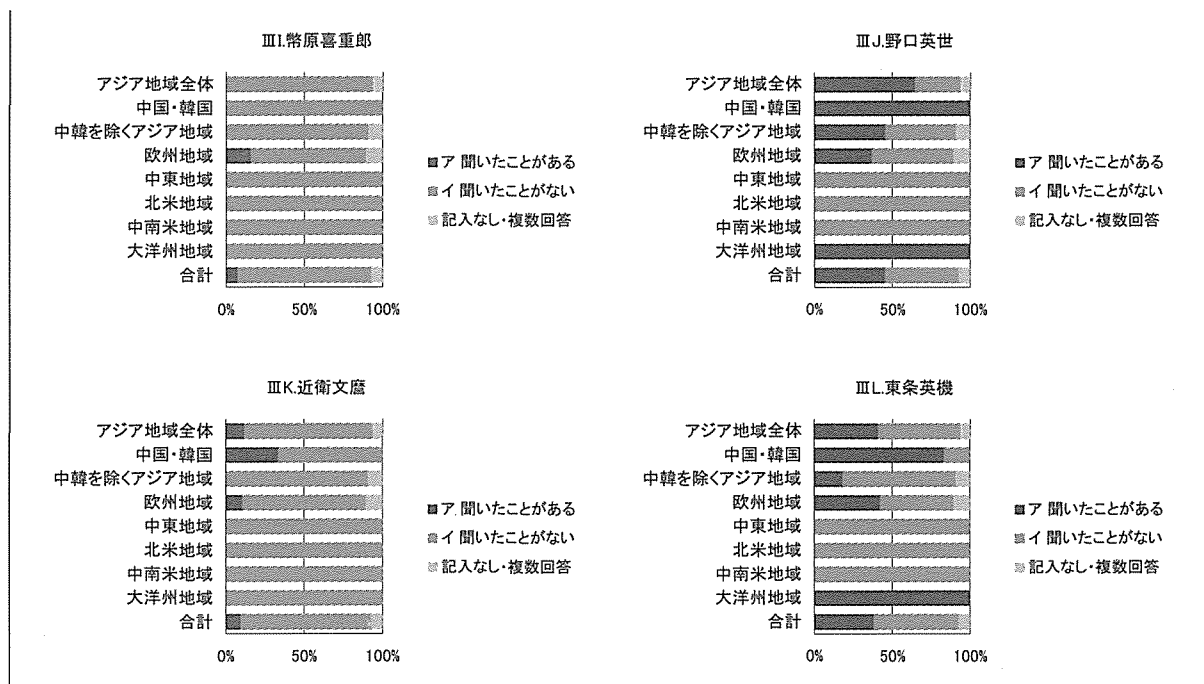


歴史上の人物に対する日研生の既習度が低い状況は近代史においても同様である。質問Ⅳの12名は前述したとおり筆者の担当する「日本近代史」で扱う人物であり、日本の小学校・中学校・高校のすべての教育課程から出題されているが、原籍大学での既習度が80%以上であった人物は日本文学の授業でも扱われる夏目漱石(88.1%)ただ一人であった。そのほかでは、小学校レベルの人物は相対的に既習度が高いとはいえ、福沢諭吉、伊藤博文、野口英世でさえも52.4%、47.6%、45.2%の数字に留まってしまっており、大久保利通に至っては既習度が16.7%しかない。また中学校・高校レベルでも、夏目漱石以外の数値はかなり低く、山県有朋16.7%、桂太郎16.7%、原敬9.5%、加藤高明14.3%、幣原喜重郎7.1%、近衛文麿9.5%、東条英機38.1%

という、極めて厳しい結果となってしまったのである（図表12）。日研生のほとんどが日本の中学校・高校レベルの日本近代史上のこれら重要人物を学習したことがない状況下では、「日本近代史」の授業で日本人の高校生や大学生が受けるような授業をそのまま提供することは不可能であるため、日研生に日本の大学院進学に必要なとされる学力を日本人学生と同じように身につけさせることは難しい。日研生の日本史教育ではやはり日本の大学院に進学させる目標を頭の片隅にほんの少しだけ残しながら、日研生の学力をできるだけ高めておくことが課題となるのである。

図表12 「日本史・日本近代史学習歴アンケート」質問Ⅳの集計結果





それでは、日研生の原籍大学の日本史教育には地域的な特徴が見られるのだろうか。本章を終える前に、受け入れ学生数が5名以上の中国・韓国、中韓を除くアジア地域、欧州地域の3つの地域からの日研究生が「日本史・日本近代史学習歴アンケート」に対してどのように回答しているかを確認しておこう。まず、質問Ⅰと質問Ⅱの地域別集計からは、古代史・中世史・近世史・近代史などの専門性の高い日本史科目を提供している大学のほとんどが欧州地域の大学であることが分かる。一方、中国・韓国や中韓を除くアジア地域の大学では、専門性の高い授業を提供している大学も一部には存在するが、授業の大半は古代から近代までをすべて勉強する授業と世界史や日本事情の一部として日本の歴史を勉強する授業となる。

また、質問Ⅲと質問Ⅳの地域別集計を見てみると、前近代史上の人物を尋ねる質問Ⅲでは欧州地域、近代史上の人物を尋ねる質問Ⅳでは中国・韓国の既習度が最も高いのに対して、中韓を除くアジア地域の既習度は3つの地域の中では一番低いことが分かる。質問Ⅲと質問Ⅳで既習度の高い地域が逆転しているのは、中国・韓国が近代史教育に力を入れているからではなく、むしろ欧州地域が前近代史教育ほど、近代史教育を重視していないことに原因がある。実際質問Ⅲと質問Ⅳで尋ねた歴史上の人物のうち、日本の小学校レベルの人物について見てみると、欧州地域の既習度が80%未満の人物は前近代史においては13名中卑弥呼(78.9%)と中大兄皇子(天智天皇)(52.6%)の2名しかいないのに対して、近代史では大久保利通(15.8%)、福沢諭吉(57.9%)、伊藤博文(57.9%)、野口英世(36.8%)の4名すべてが60%未満を記録しているのである。また中国・韓国が近代史教育に特に力を入れているわけではないということは、質問Ⅳで尋ねた日本の中学校・高校レベルの人物の既習度が、夏目漱石と東条英機を除くと、極めて低いことから明らかである。欧州地域が近代史教育にそれほど熱心でない理由は今のところ分かっていない。

第3章 CJLC日研生向け研究科目「日本史入門」「日本近代史」の授業内容と原籍大学の専門教育を取り巻く環境

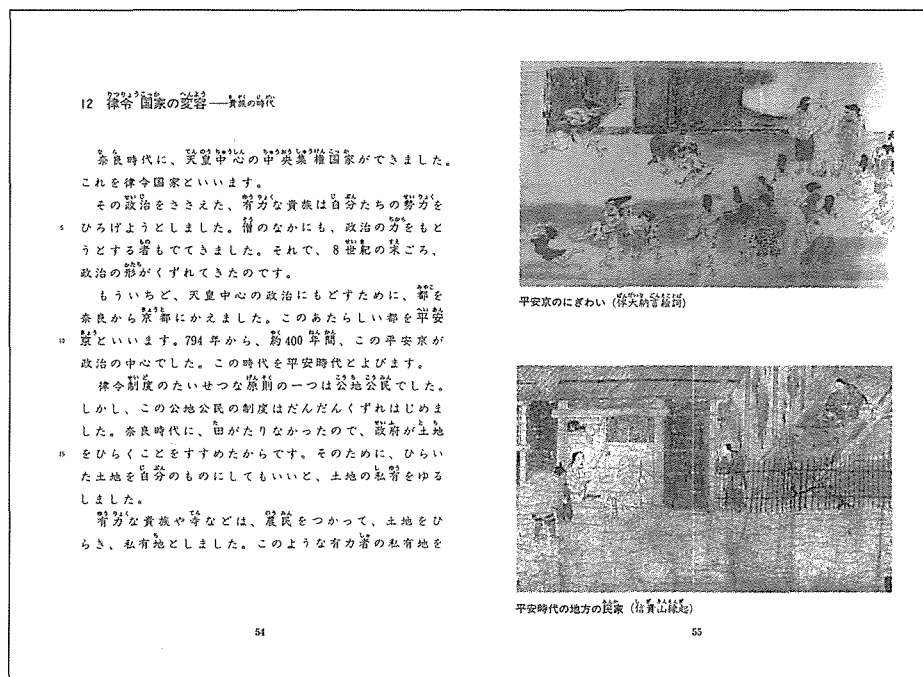
第2章の「日本史・日本近代史学習歴アンケート」の結果、原籍大学で日本史科目を履修したことがある日研生の中にも日本人であれば必ず知っているような日本の小中学校レベルの歴史上の人物を聞いたことがない学生が何人か含まれていることや、日研生のほとんどが原籍大学で日本の中学校・高校レベルの日本近代史上の重要人物について学習したことがないことが判明した。本章では、原籍大学の日本史教育が決して十分であるとはいえない中で、筆者がCJLCの日研生用の研究科目である「日本史入門」と「日本近代史」をどのような形でやっているのかを紹介したうえで、専門教育の向上に関して原籍大学の反応が鈍い理由についても、筆者の知る範囲で指摘したいと思う。

(1) 「日本史入門」の授業内容

「日本史入門」は原籍大学で日本の歴史を全く勉強したことがない学生を対象に提供される科目である。そのため、一つの授業の中で原始時代から近代までの日本の歴史を概観できる代わりに、授業で扱う人名や歴史用語のレベルを日本の小中学校レベルに押さえるなど、授業の難易度は低めに設定されている。「日本史入門」は日本の大学院進学を視野に入れた科目であるというよりも、そのかなり前の土台作りの役割を担う科目として提供されているのである。

「日本史入門」では東京外国語大学留学生教材教育開発センター編『留学生のための日本史』（山川出版社、1990年）をテキストとして利用している（図表13）。『留学生のための日本史』は日本の歴史の流れをコンパクトに理解することのできる非常に優れたテキストである。しかし、日研生の多くはこのテキストの本質を見誤ることが多い。

図表13 『留学生のための日本史』

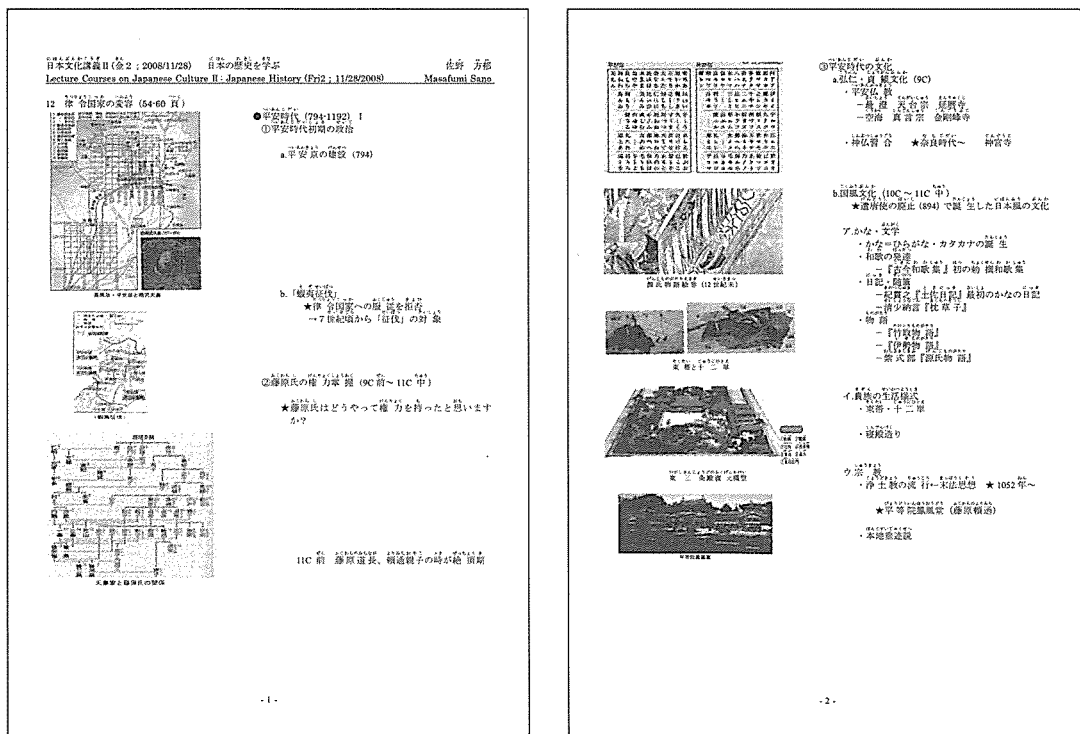


日研究生がこのテキストの良さをなかなか理解できない原因は、このテキストが元々国費学部予備教育留学生用に作成されたことにある。国費学部予備教育留学生の中には日本語を全く習ったことがない状態で来日する学生も何人か含まれている。そのため、『留学生のための日本史』は初級レベルの日本語を用いた叙述から始められており、日本の小学校レベルの人名や歴史用語であっても最初のうちは極力使用しない傾向にある。日研究生の多くは『留学生のための日本史』を表面的に捉え、「日本史入門」は易しすぎる授業なので、自分は履修する必要はないと判断してしまいがちなのである。

しかし、第2章で指摘したとおり、原籍大学で日本史科目を全く履修したことがない学生以外にも、日研究生の中には「日本史入門」を履修することが望ましい学生が何人か含まれていることは間違いない。筆者は「日本史入門」の難易度に対するそれら学生の誤解を解くため、『留学生のための日本史』にはない日本の小中学校レベルの人名や歴史用語を実際の授業では使用することを強調する一方で、第2章で用いた「日本史・日本近代史学習歴アンケート」の問Ⅲの15名の人物に福沢諭吉・伊藤博文・東条英機を加えたプレースメントアンケートを実施することで、日研究生に日本の歴史に関する自らの学力を客観視させるように努めている。

実際の授業は授業の流れを示すハンドアウトを中心に行っている（図表14）。ハンドアウトを使用するもう一つの目的は『留学生のための日本史』だけでは不足しがちな小中学校レベルの人名や歴史用語を付け足すことにある。とはいえ、「日本史入門」は元々日本の歴史が未習の学生を対象に提供される科目であることに加え、留学生の中には固有名詞を苦手にするものも多い。小中学校レベルの人名や歴史用語を付け足すとはいっても、そのレベルの人名や歴史用語をすべて網羅することは不可能であるため、筆者の方で厳選しているのが実情である。

図表14 「日本史入門」で使用しているハンドアウト



授業では固有名詞以外の語彙は易しめの語彙に置き換えながら話を進める一方で、聞き取りが苦手な学生に配慮して、ルビを多用しながらなるべく板書するように心掛けている。また視聴覚資料の使用は学生に視覚的なイメージを持たせる意味でも重要であるが、日本人向けの視聴覚資料は固有名詞以外の語彙も難しい。事前に内容を説明することやスクリプトを用意することが不可欠である。

成績評価については出席50%・試験40%・クラス参加10%の割合で算出している。出席の割合を最も高くしているのは学生に授業への出席を促すためである。歴史教育は連続性を重視する教育分野であるため、授業を欠席すると、それ以降の授業を理解できなくなることが多い。試験については学生が10個の問題の中から2問選んで10分間の準備の後に回答するインタビュー形式のテストを、学期の途中と最後の2回実施している。学期の途中に試験を実施するのは、歴史教育のような連続性を有する分野では、途中で一旦知識の定着を図った方がそれ以降の授業の理解も促進されると考えるからである。最後のクラス参加は授業に積極的に臨んだかどうかを図る項目であり、授業で質問したり意見を述べたりした学生を評価する。

(2)「日本近代史」の授業内容

「日本近代史」は「日本史入門」とは異なり、原籍大学で日本の歴史を勉強したことがある学生を対象とした科目である。しかし、第2章でも明らかになった通り、日研生のほとんどは原籍大学で日本の中学校・高校レベルの日本近代史上の重要人物の多くを学習した経験がないため、日本の高校・大学レベルの授業をそのまま提供することは難しい。「日本近代史」の授業では、日研生に日本の大学院進学に必要な学力を日本人学生と同じように身につけさせることなく、日本の大学院に進学させる目標を頭の片隅にほんの少しだけ残しながら、日研生の学力をできるだけ高めておくことが課題になるのである。

それでは、「日本近代史」の授業はそのためになにができるのであろうか。筆者がその方法として現在用いているのは、授業で扱う中学校・高校レベルの人名や歴史用語を少なめに抑える一方で、そうした状況を少しでも補うべく、筆者の考える近代史上の主要人物に関しては、最新の研究成果を踏まえて詳しく説明するという方法である。こうした方法を取ることで、日本の大学院で日本語・日本文化を専攻する際に必要不可欠な日本の高校レベルの日本史を厳密な意味では提供できなくなるが、日研生の渡日時の学力を考えるとやむを得ない。

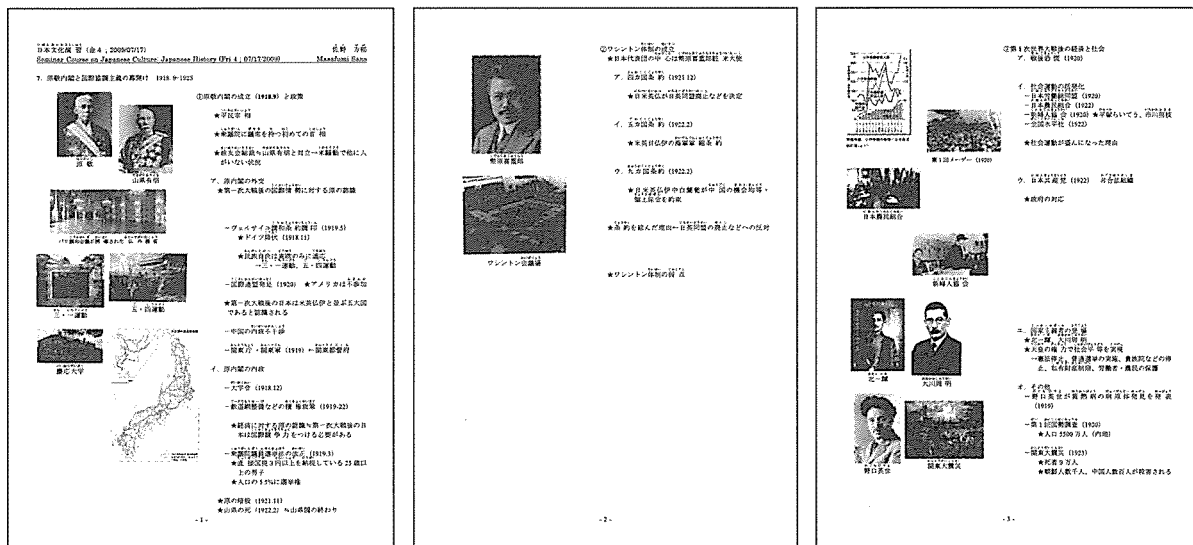
筆者が主要人物として選定しているのは、第2章の「日本史・日本近代史学習歴アンケート」の問Ⅳであがっている大久保利通・伊藤博文・山県有朋・桂太郎・原敬・加藤高明・幣原喜重郎などの政治家である。例えば、山県や幣原は日本の高校レベルで初めて登場する人物であるが、山県や幣原を詳しく説明しない日本の大学レベルの近代日本政治外交史の授業はない。授業の中でこれらの人物について詳しく説明するのは、近年の歴史学界では自由民権運動や社会運動を重視するマルクス主義の影響が弱まり、これら人物の対抗関係の中で1920年代までの議会政治や政党政治の発展の歴史を描くことが主流になってきているからである。しかし、これらの人物を中心とする歴史を強調するだけでは、近代日本の国内状況に関する日研生の理解が一面的になってしまう恐れがある。筆者はこうした弊害を避けるため、近代日本の経済・社会・文化の側面についても、時間の許す限り説明するように努めている。

また「日本近代史」の授業には当然のことながらアジア圏からの学生も出席しているため、

その他にも近代日本の戦争をどのように説明するかが鍵となる。実はこの点は筆者が「日本近代史」の授業を始めた時分に最も苦勞した点でもあるが、無理に結論を出そうとせず、欧米諸国の動向を踏まえながら日本政府の考え方を説明する一方で、侵略された側の立場にも言及し、日本側の問題点を指摘する姿勢を保ち続けられれば、それほど大きな問題は生じないようである。

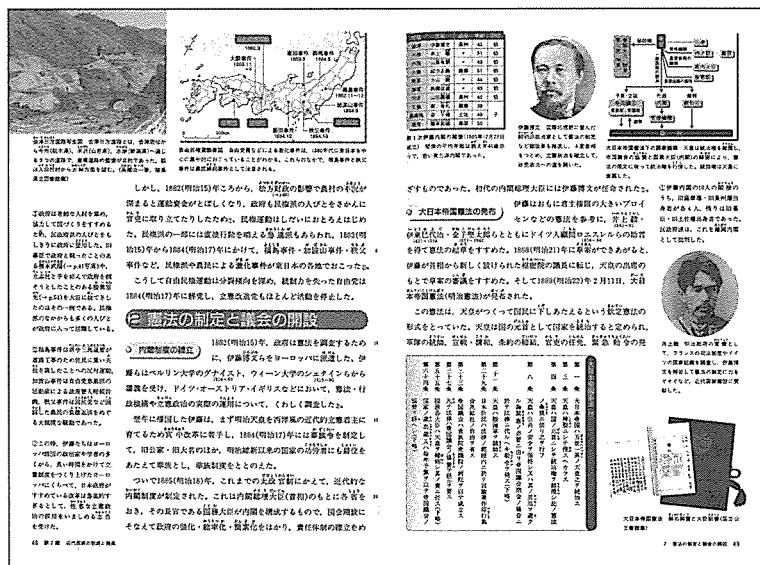
実際の授業はこれらの教育目標に即した形で作成されたハンドアウトを中心に行っている(図表15)。

図表15 「日本近代史」で使用しているハンドアウト



テキストとして使用しているのは、日本の高校生用の日本史教科書のうち、近現代史の部分をコンパクトにまとめた日本史Aの教科書に当たる鳥海靖・三谷博・渡邊昭夫『現代の日本史』(山川出版社、2008年)である(図表16)。しかし、当然のことながら日研生にとってこのテキストをそのまま理解することは難しいので、筆者は学生に対して授業で分からないことがあったときの辞書代わりにこのテキストを活用するように勧めている。

図表16 『現代の日本史』



ている。例えば、本学は2009年11月にマレーシアのクアラルンプールで日本語・日本文化に関する国際フォーラムを開催した。この中で東南アジア地域の諸大学の教員が日本文化教育の現状を報告する分科会も開かれたが、日本語運用能力の改善に時間が取られることや専門分野を教えられる教員がいないことに加え、学生のほとんどが研究者ではなく、日系企業への就職を目指しているので、専門教育を充実させることは難しいとの指摘があった⁶⁾。今後日研究生プログラムと短期交換留学プログラムの違いが明確化すれば、日系企業への就職を目指す学生は短期交換留学プログラムを利用することになるので、日研究生プログラムとしてむしろ深刻なのは原籍大学における教員不足の問題である。教員不足により原籍大学で専門教育を充実することができなければ、筆者の授業の事例からも分かるように、日本での大学院進学や研究者養成の入り口である日研究生教育のレベルも低下してしまうため、日研究生プログラムをそうした方向で特化させることは難しい。この問題を解決することは容易ではないが、何らかの対策を講じていく必要がある。

おわりに

日本政府の財政状況が悪化し続ける中で、短期交換留学プログラムとの相違を明確化するため、日研究生プログラムは日本での大学院進学や研究者養成につながる独自の教育目標を設定すべきではないかといった意見が出され始めている。本稿では、日研究生の専門分野に関する学力をどの程度まで高めることができるのかといった問題関心から、CJLCの日研究生向け専門教育について概観した後、「日本史・日本近代史学習歴アンケート」を用いて、日本人学生の教育内容と比較しながら、日本史に関する日研究生の渡日時の学力を分析し、筆者が実際にCJLCの「日本史入門」と「日本近代史」の授業をどのような形でやっているのかについて紹介した。

「日本史・日本近代史学習歴アンケート」の結果から見ると、原籍大学の多くは日本史教育を十分提供するには至っていない。こうした原籍大学の日本史教育の現状は日研究生の日本史教育のあり方を大きく規定し、筆者の行っている「日本史入門」は原籍大学で日本の歴史を全く勉強したことのない学生を対象に提供されているし、既習者向けの「日本近代史」においても日本の高校レベルの日本史教育を厳密な意味では提供できずにいるのである。日研究生プログラムが今後日本での大学院進学や研究者養成につながる方向へと教育目標を特化させていくのであれば、原籍大学との情報交換を密にし、専門教育の向上を求めていく必要があるであろう。

注

- 1) 日研究生の定義や待遇などについては「2009年度日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項」（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/boshu/08121006.htm）や『我が国の留学生制度の概要 平成20年度』（文部科学省高等教育局学生支援課、2008年）を参照。
- 2) 近年の「日研究生問題に関する検討会議」では、第14回会議（ホテル日航茨木大阪、2008年9月19日）と第15回会議（ホテル日航茨木大阪、2009年9月18日）で、日研究生プログラムと短期交換留学プログラムの棲み分けが中心的な話題となった。
- 3) 小学校で取り上げるべき歴史上の人物42名については、「小学校学習指導要領」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b.htm）を参照のこと。
- 4) 中学校の歴史教科書の占有率については2006年度版を使用した。詳しくは『教科書レポート』第50号（2006

年版)、『教科書レポート』編集委員会、2006年)、69頁を参照のこと。

- 5) 夏目漱石は小学校用の教科書である『新編 新しい社会 6 上』(東京書籍、2009年)の97頁に掲載されているが、本文ではなくコラムでの登場であり、「小学校学習指導要領」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b.htm)には名前がないため、本稿では中学校レベルの人物として扱うことにした。
- 6) 『大阪大学フォーラム2009 報告書』(大阪大学フォーラム2009実行委員会、2010年)の分科会3の部分を参照のこと。

(さの まさふみ 本センター准教授)